



2022秋・色々ありました

1 歩いて巡る屋外写真展 虎杖浜・アヨロ

9月26日、お隣白老町で開かれている「歩いて巡る屋外写真展 虎杖浜・アヨロ」（8月27日ー10月10日）に足を運びました。

虎杖浜地区の海岸通りにある建物26カ所に、虎杖浜のアマチュア写真家・故山崎寿昭さんが撮影した写真38点を掲示した野外写真展で、昨年が続いて2回目のイベントです。じっくり見て歩くだけで、ゆうに2時間は要するまちごとフォト・ミュージアムでした。同時に、佐藤三次郎が書き残した「北海道幌別漁村生活誌」を思い出しました。



それにしても、これほど大きく引き伸ばした写真を建物の壁に張る技術力はすごい。企画・実行された方々の歴史を再生する想像力に感服するばかりです。

公式の開催期間は過ぎましたが、写真は風雪にいたぶられるまで、見ることはできますようです。まだ、ご覧になられてなく、お出かけ可能の方におすすめてです。

2 我、ゴリラ岩と命名す

室蘭市寿町のサーファーが集うイタンキ浜。あそこから見える鷲別岬突端のフォルム=①=がゴリラの横顔に見えるのは、私だけなのだろうか、と常々思索していました。そこで先日、車

に同乗の家族に「な、な、ゴリラに見えるだろう」と水を向けたところ「見える、見える」の賛同票を頂戴しました。

さらに、西側のクジラ半島=②=に目を転じると、こちらもまたゴリラ顔に見える気がしてならない。近くを通る機会がある方、一度、ハンドルの手を休めてご検証あれ。

3 2羽のカモ、オシドリか？

シャケ来ぬと

目にはさやかに見えねども

カモの夫婦におどろかれぬる

有名な和歌の一首をもじって詠んだ場所は、散歩コースの途中にある富岸川に架かる橋の上。最近、ひょっとして迷い込んだ鮭がいるかも、なんて舌なめずり

しながら欄干から顔を出してみると、カモの夫婦らしき二羽が餌を探して流れを遡ったり、下ったりしていました。



鳥にも草木にも浅学なので、ネットや頂いた関係本を開いてみると、コガモのようであり、鷲別川でも見られるというオシドリのようなでもあり…。まあ、カルガモではないようです。見られただけでもラッキー、といたしましょう。それにしても、この秋、鮭は高ネです。

4 建築現場にユーモアを



自宅から数メートル先の住宅建設現場を通ったら、思わず（うまい！）と、心の中で座布団一枚差し上げました。

内壁の建材として張られたボードに、「影武者」ならぬ「壁武者」の商品名あり。なるほど、室内からも、外からも見えないが、良質な住環境を提供してくれる影武者的存在であることをアピールしています。

調べてみると創業75年の東京ボード工業なる会社が製造している木製ボードですが、素材は製材所などから出る端材などの木質廃棄物。「木々に永遠の命を与え、リサイクルで地球環境の未来を創る」という企業精神は時代を先取りしてきた証拠ともいえます。

初めて、このボードを手にした大工さんもニヤリとしたことでしょう。「どうせ同じ仕事をするなら、楽しくやろう」のWork Mindよろしく、ネーミングにもユーモア精神が大切なようです。

5 和ませてくれるクリニック

お世話になっている某クリニックの待合所の椅子に座ると、向かいの壁に季節や健康などをテーマにした通院患者参加型の掲示物が飾られていて、心和ませてくれます。

先日も定期受診で出かけると、全紙大2枚くらいの厚紙に「秋の〇〇選手権」と題して「読書の秋」「実りの秋」「味覚の秋」「芸術の秋」など10枚のイラストが並べられていて、それぞれの絵の下に丸い赤色のシールが…。来院者が「自分はこれ」と思う項目の下にシールを張る人気投票でした。



昨年秋は確か、ブドウや柿、梨などを選ぶ味覚選手権だったし、春には3つのお題で川柳を募集するなど、看護師さんや事務スタッフの皆さんが、「次はどんなテーマ

に」と、額を寄せ合い知恵を絞る光景が浮かんできます。

で、この日の時点で人気投票第1位だったのは「紅葉の秋」、次いで持病の数値とにらめっこしながら逡巡（しゅんじゅん）する「味覚の秋」「食欲の秋」の順でした。さすがに「スポーツの秋」は3票で、（その元気があれば、ねえ）とポッコリおなかをさすりながら、嘆息するばかり。

ともあれ、色々と和ませてくれるこちらのクリニックに、座布団ならぬ「ヒョーショージョウ」を1枚進呈です。

6 足跡は残されたが…

登別市立図書館郷土資料室にあった未整理の郷土文化研究会関連資料を仕分けしていると、昭和45年8月から13年間発行された会報綴りとともに、昭和48年の市民文化祭に特別出品された写真が出てきました。

その1枚が、西札内地区に大正7年に建てられたS

さん宅の母屋のカラー写真です。板壁などは時代の変遷を経て替えられているのですが、どっしりとした見事な藁葺き屋根だけは、大正期の面影をしっかりと伝えています。



ほかにも、同じ札内地区のOさん宅や畜舎、鉢山町の発電所外観や納骨塔、片倉景光屋敷跡の案内板などがありました。すでにこれらの歴史遺産は消えてしまったようです。オリジナル版でないにせよ、残された歴史資料写真はどこか1か所に集約したいものです。

段ボール箱の中には他に、領収証綴と書かれたスクラップブックが1冊あり、見返しにはこう記されていました。

ささやかながら わたしたちのしずかな

あしあとを いつまでものこしたいものです

各種郷土史資料や著作物、公文書や写真などを一堂に収めた登別文書館の実現、夢でしょうかね。

7 発祥の地から落花生が

この秋も「落花生の新豆が出ました」と、横浜に住むIさんから、奥さんの実家がある秦野市名産「相州・秦野名産 素煎落花生」が贈られてきました。春に続いての、年2回恒例の到来物です。

国産落花生発祥の地・神奈川県秦野市。落花生といえば千葉県も有名ですが、千葉のそれは秦野市の栽培成功（明治4年）より数年後の話とか。



「秦野郷の住人であるこの男が横浜の南京町で一握りの宝を手に入れた」との筆書きと、豆を栽培する男のユーモラスなイラストがほっこりさせる包装用帯絵。それを眺めながら、一緒に贈られてきた焼酎をチビリ、銘産落花生をポリポリ。相州より吹く秋風、また爽快なりーです。

薫風 烈風

▶「国葬」は終わりましたが、いまだ世論調査では「評価せず」が半数を超えています。そこで思い出したのが、「そんなに（人）呼ばなくてもいいんだけどね」と、頭に天使のリングを載せてブランコをこぐおじいちゃんのテレビCM。「まあ“故人”の感想ですがね」なる遺言？ が、くすぐってくれます。

死期をさとした老人が、自分の葬式に来ていただきたい方はこの人とこの人ーと、事前に家族に告げておいた、そんなケースを身近に知っています。

葬式は誰のためのものか。あらためて考えさせられますが「閣議で決めれば、何でも出来る」時代だけのご免こうむります。では、皆さん、お元気で～。